

# バイオ技術で 遊歩道を彩る

阿南市の離島・伊島を淡いピンク色に彩る希少植物イシマササユリ。毎年5月末から6月中旬にかけて、多くの人々を魅了する花の保護に情熱を傾けている教師がいる。10年前に母校の新野高校(同市新野町)に赴任した野賀田耕一教諭(42)＝同市椿町旭野＝だ。自身も高校時代に学んだバイオ技術を後輩たちに教え、培養した球根を島の遊歩道沿いに移植し続ける。約1・5㍍の区間には約7千個が植わり「バイオロード」と呼ばれる名所に育った。

## 新野高 野賀田 耕一 教諭

バイオ技術との出会いに使ったバイオ技術を習得は、椿町中学校3年の夏休みには、当時の副顧問で、現在新野高で開かれたキクの培養体験会。花卉を培養用の試験管内に植え付け、約2カ月後に分裂を繰り返してできた細胞の塊から芽が出た。生命の神秘とバイオ技術の可能性に胸が躍り、新野高に進路を決めた。新野高では、伊島への移植活動に取り組みバイオテック部に入った。生来の探究心に加え、真面目な性格や手先の器用さも手伝い、球根

を使ったバイオ技術を習得した。当時の副顧問で、現在は教頭の大田孝延さん(53)にはササユリの希少性や郷土の花を守る大切さを教わり「学んだ技術を地域のために役立てるやりがいを感じた」と振り返る。素朴な疑問にも丁寧に答えてくれる恩師に次第に引かれ、卒業する頃には「自分も教師の立場で保護活動をサポートしたい」との思いを強くした。宮崎県の南九州大に進学後は遺伝育種コースでさらに高度な技術を学び、卒業論文はユリの品種改良をテーマに選んだ。

## 10年前から母校で生徒と

7年に母校の教壇に立つた。バイオテクノロジーの授業を担当し、バイオテック顧問にも就任した。当時もササユリの減少に歯止めはかかっておらず、バイオテック部では移植した球根の生存率を高めるのが課題だった。部員たちと試行錯誤を重ね、従来の球根を使う培養を種子から育てる培養に切り替え、発芽率を向上させた。

遊歩道沿いに移植を始めたのも赴任当時から。自生地周辺で行っていた移植を、観光客に散策しながら楽しんでもらおうと変更した。ササユリは花が咲くまでに6年ほどかかるが、バイオ技術で育てた球根は生育が早く3年ほどで開花する。毎年、教え子たちと直径2〜3㍍に育てた球根を地元中学生らと一緒に600〜800個を植え、「バイオロード」となった。

13年からは新たな試みも始めた。自身が中学時代に感動したバイオ技術や、保護活動に関心を持ってもらおうと、近隣の中学生を対象に体験講座を開いている。延べ15校の40人が参加し、進学後にバイオテック部に入った生徒もいる。

教え子たちにもいつも伝えているのは継続の大切さ。6月上旬に行った島での移植作業では「先輩たちの活動のおかげで島の花は守られている。皆さんの球根も必ず花を咲かせ、未来につなげていく」と語り掛けた。

10年前から地道に植え続けてきた道沿いに今年も多くの花が咲いた。「講座や保護活動に参加した中高生の中から後に続く子が出てきてくれればうれしい」。ササユリだけでなく、次世代を担う人材の成長も見守っている。(南志郎)



10年前に球根を移植した遊歩道でイシマササユリを観察する野賀田教諭＝阿南市の伊島

とくいま  
スエツク帳

県内の高校で講師を務めながら教員採用試験に挑戦し、7度目に合格。2000